孫食貨志

後編

四

へ遠13
2475
24

へ13
2475
24

茶道機関

茶道志二編巻之三目録

目録

一 雪月花の事 茶道の事
茶器の名目並道具の事
一 千利休流儀の事
茶室利休庵の事

古記

[illegible]寛見聞志二編巻之七

[illegible]の事

[illegible]の事

和田北[illegible]府[illegible]

[illegible]

漢和するなどといふ事はなりけれど長歌と是
とくにし宗砌が宗匠なるなどいはれしが
心敬宗祇連歌なす事は絵をかく様に讃を
はしめん連歌などといへばいはれば
宗砌割して身にそなへんなどと覚え
となりたる作ともいふ程に是なり君の
為世のさるもとおもひ其人を深くして
なる物は作がうでも明絶の様を

むまれたるつくやおもしろ白露の露が
みそのかゝりて袖にさけて草をとる
べし若人遠方のしらすありて思ふ事
と割せられたる加様なる事おかしく其
席にて連書をとこのみてし誰か詠
筆作りなべしかりける宗祇はいふ
く在原業平文筆の巻をするも
源氏物語にかなとちいさき見るる

人々のもとへ先しらせ給ふ
ものも仲業とも給へ右の御書をも
ぐしつゝ遣さるべきのよしをの
そびたゝ仲業是をうけてもとへ
て返し給へ筆作法ならいとぞ
彼と陳ぬ中よ彼と筆をとゝのへ
ざらんと書給へ筆をとゝのへ
明日平氏が家の神事にて清書ふ

べしとて浄蓮房ものして其日いたの
巻数をおくられ十月廿八日
弟聖の巳文をよせ諸寺諸社の
祈祷のうち二十箇寺新田宮熊野
三摩耶弟持経二十箇寺二箇
寺正安寺元三摩耶弟陰
小二尼房尉相政日吉御願
相光比企尼房尉弟能

重　波多野次郎忠綱　大井次郎実久
宇都宮弥三郎頼綱　佐々木左衛門尉定季
渋谷次郎高重　山内刑部丞経俊
筑後六郎知尚　下河辺庄司行平
安達藤九郎盛長　天野藤内遠景
佐々木三郎兵衛尉盛綱　土屋次郎義清
岡崎四郎義実　稲毛三郎重成
東平太重胤　土屋次郎忠光

河野四郎通信　曽我小太郎祐光
諏訪次郎盛澄　民部丞行光
右京進仲業　仁田四郎忠常
左衛門尉義連　藤沢次郎清近
加藤太光員　小鹿島橘次公業
梶原兵衛尉景茂をはじめとして
鎌倉の御家人都合三千三人高鴫が
客の上座より膳ならびて饗膳をとる

うたをよみて初めに義経をみかの
ゆうて頼朝のこゝろ義ひとをうち義経
ゆゑとこゝろ一所命をもてわたを加む
足おゆゑの不動のうちに掘屋家時
家侍軍の立世の柳の彼が所用云
無所なるをもてて安宅の関を義経
なる今更しるおりたゞ行ちよ羽織
の情代をいうもてとを後をを孝ら

て頼朝と言ん家の太郎
義経の後足をもちおりるいるー足て
ちの右衛の所をもひ北織と
逆天下のお幸をみてて弁慶
の織を弾ん多いい小四を弾ちと
ちをいいしも天の義経ちを
ちち嘆く弾弁をうぐ逆天
さちんをとうをてもるをもち彼か

信濃とをちこち信濃連歌をとうと
上京と信濃とをちこちとなりつる事問
羽林の侍従一位殿ひとり初度百
韻信濃もしるしくるらんも計らるべく
|をちこちとて西京の魂となるべき
御所と東国信濃連歌つくるよりたに
東国にて信濃かつてかつてよりの
大夫まとの計をとるべき

ちこちなの義をよりて連歌よ
加判をもて遠国のあるべき御所と
ちこち|若きまく事問と思ふる所
る|信濃と思ひ出ふるまかい所
遠国ちこち|神い林祝を諸国
ばとり|ちなの祝部まて義信の
方を指御|信濃とりやうじゆうち
ちこちい信濃ちこち|貴国を

かくて此ころは新参の侍嫡人
誰れ人といふもむそのかゝるの悦び
ましも我身をつきりふそのうちに蘿
いかなりける罪にかすても三衣袈裟をも
まだ一生の無常をかへし佛像をたてる
よりし善行なれ二一彼に文字をとゝ
もいへ廣大の善行を行ひてそのうへ無
益の慈悲をもとゝ此て諸艱とらのし

なんぞうくる之彼が関をとらへ中きさんとを
無念のあらし之を申しあるは業たし
云ふ右草のとは命じて誰しそ
物事をとなへて仏ものにたてて
四郎を書きたまへし千余人の家へ
まかつりつや霊やのあうと筆へたせ
りうく明白の花にてんといかぎ
まみてまりうし其中に兼とらふその

い程とゆるされたる数とうつるのい
大とゆるされたるとて又行ると道
弾ゝ物角とりんと 仲業筆
第五一りうと第六
状の中より形式のしるべの性形と
ちうさ一ゝ判形とうとまる
功方の雲間よりうぶるる雲間仏
入道第美い元南元月雲が四四

ゝて お供第四郎が合戦ならと物語
ゝ第六の第初りうと九月と一石橋
山の合戦より世ゝ 石橋山の合戦より世ゝ
数おかゝいゝ九郎と御一りうる
京四郎がうるゝ功をあるうと悪源を都
りうゝなりうと一りうる 是を指ゝ
ゝりうゝ九郎を水の日と命と
是のゝかるゝみりうる四郎りうを是を

ゐる今年まで八十九年の命をゆたん
ト聞くらしが今北條氏の一族なりと
牧ゐるとなると金澤のうで家名よりと
の前年と少し違ひて寛永元年
の弱六年年とも一同と夫れ
らくらくて建物と人百姓命ともに
生きるなるべ六年を正命と真言
宗陰盛衰なりと板倉殿ゐると我々

ゐる一周年の命とくもい稚玉ゐ
ゐるなるかゐる前周よりたく訳長
生きとなるとゐるぞゐ我ゐぐ下ます
諸人の盛衰とみるよつて所詮と思
所ちんなるをゐるつよ命長さと同も
くくく何ものいてゐんゐや今ゐふ
ゐ碑恩のを為ゐると作我右お將軍家
ぐ命ゐるまましに所ゐとしくゐ

ふたゝび義兵を揚けしのときハ父子共に
一どくするハ波加ゝとして石橋山の戦ひの功名を
討もらさず君をたすけ奉り手柄しけるに
隠所を見のがさ候ハ此罪をいへるゝ
ふかゝる梶原景時とかゝりて山家
君と秋なりしがかうろしが石橋山の
御免許を被ゝ計らひて此怪とせ
ざりしゆへ君をうらむまじ

おしかゞひ景時が讒言を申されし讒てとゞめ
まひかつて讒者ハ無道の邪にすゝめられて
我身をうしなひ親を捨の恩をかゝるゝ
い是なりし石黒僧ハ天の怒せし君事なりし
免難をのがれけるも神仏の冥護によ
よりてなりし汝人力のおよぶところに
あらず梶原がみのがしけるをもあれ
ゆゑ宗望のかなところありし始をたえ

の諸事と押の名新系の系図を記
んと一年京都の所司一方の大僧正
命じ給ふ彼が病を治するの霊験
実に驚き奇異のあらざる能はざるこの
命にて中務もまた彼が弟子なる
ひろと是嘉永の頃三年の
月をとりつゝ定業と年貢を
送るとなりこれみな彼の恩

の御問答にて彼と退作
の弟子にして長者の四
とゝ云へるは却て弓矢を
一種の勝負とのこと若の伝を脱
を作る私 吉備に彼が長者
書をへつゝ生涯のさ老命は
送りしが今吉兵衛の恩を強へ
彼を計るゝ彼よりて長者

の福をあらしたまふ玄家
して明月と共に知るべき老の所のかなし
の才をもて加ふる条嬉姫御ゆ
つとりつゝ彼と遊ぶ諸人の数をも
そこんなる事の中の花に年
いとたとへ数よりおのれ仕年の花中の
ちなる美者人の年のあるとも
いづして才をと称して新義の論

十一月より美人通の中を奈一般
御傷ーいよ〳〵重なり四季をあ
憂愁なるべし〳〵ふ海てんなる成
りふ我と判形して主家絶り
りの退散なるべ海姫い美
登長の高人廣元なるを居之ぐ
さんや帰付て彼の事へ

諸士悔服が四郎を殺す事

并 悔服家より鎗奪退去の事

和田義盛無主家の輩長盛が所逐
電人論議とりたてはの事
より申す 弟盛論議を論
主従義の事 一流の論議の人
事 羽林の事 物語のうちに

くとせしに廣元仰せの論議
ゆゑ悔服家より鎗奪退去の事
弟盛とたゞ元六千騎人判形の
論一なりと廣元たゞ
なる事ゆゑ主従ゆゑ
なりといへども彼を左衛の義長より
して義義論議
とのうと百とのの論代

渥郷にありけるが　天清義年なりけれど
世々の浪浪として　其のつけなるおのし老臣の
故事なりしかども　今一度日光菓の行ふことや
とたりけれど弟監物おもふところあり　書風は
おもふことをかゝしたる所謂なりけれ　何で
出会と推察しのひをまる　此君と本
しかるに又や態と披見せられし　常
めをみてありひかりける　書伝の吾か衛士将

明を輝きしその　緑林之老臣に八十
余党をかたとして　壮年数千まで何の業
をつとめる中に　同志なるに　到連判にのぞび
し　丈　百年拝見のもひ　連名のものども
みなみ乱心ゝ談をおもふ　誠忠大丈夫の
ておもふべし　ありしと　我ぐに割しある
な　披露　説混しのけれど　書絹におよびし
やかしけれど　日かつく篤志の弟監物

はまぐるうの筆ふしてのちひるね
を覺えを起るよりおもむきの素一
おうぎだつづら開しと拝見して感ず
べしとはいかで第壁為ちらく新
なるなりと天のうちよりつたる書方ありて
あるをうとうとうつらうのちはかりねのそる
ゆうき物語しらと意元物語てばく
と拝見して御さの御さのうつくしきる

意時分あるを御らうをを惜まるいかう
や好きども好きを弾つ指原が一族
ゝ弾御るおうぶつづきうら一元和軍の義と
うきしん静より意時が指図をもばらし
ものを弾御るおうぶつまるる義
かりのどるおりひうしまかりぐるや
ら義知く弾ましぶ中とうら元
まを侍るよ拝して拝るが連名のうん

義経猶憤をおこしてよりともをうたんと
と思ひを抑へし書かみをけし万一の義あ
かさねがさね京都みなを理らせ子謝せ
へて清盛ゝ今やと待居なれどもなに
目と一かたならず何の仰もなし是に依
て壮士ら義経に催促して義経を討
とるべし十二月十日大江広元の
館にいりまして対面して此頃の語ひの様

腹あしくしやうしく清上のゆかりなく
いかあるべきそれだに広元かくて返文
ひくるたびには越ごえなりにしかば義
経いつもていつる鎌倉へ美兼自の
臣としてたれよ多くの年をともにあひみるに
梶原か一旦の讒の讒言につきたま
類すら定讒言かのみこそ義経を
ただちに追罰のところ何ぞ命令をかへ一度の

縄とありし楽織を退出んして郎等あるの
人々謀臣の侍にて兵なよりし覚悟を
懐えん目にも是をなすはのところに書
少将高のなりしに若干仙会ならるなまり
来たりへぶしきよ平家なりしむ謀が為
よ良臣と生れて文明たりし政不首
なれども薩摩守剣にもし君の御代女
と契りし論をとならせしらし都一山と紀し

中国文気一か風とおもふてしばらくし継
存のし候に候ども上意とびしをカり
おもひには今日までお侍とさせてもり
ありし侍女右大将也其の浴と情し
べき御身なりるもみぐるし忠臣と讒言
しさしと義太の主君那覚を論し
言せんして計る氏謀が自滅のいたりし
なりし君をも亡さへとなさししる氏が事

怪の備とはいふべし而て乱るるにやせし
くは広元奇策をもてまつりし彼を
おそるるによりて海道の守護にて道理
よくおぼへても発動におよぶべきと
いふ身おもふべし見合もいかなる義
ふ善悪をもてもはからず御進退と
其下海伯を以てしみてなるや京都を涯
是らは海を望もとしいとはなしといへる

海道なくして陸もたゞ君を怪しまざる所
理なるを上古しかるにかれらは悪人
を制なりなれば下として是を繕もしおさ
しく我雲の沙汰におよぶまじく羽林の偽
あらば是をもはらし一意のうらなく邦
と外ならに政道の趣をととのへ天下
皆一統彼におゐていかなる勘定のまかせ
給まふべきと急急におもひ加へるも

那を紙一つゝゝ仏中たゝ伝びいよ
たゝ事と聞もて一たゝ行べたゝ平の春ひ
なるらん遠方のうん〳〵高極をうんで
その海一つとゝ一ぐゝ考行海事ゆうま
ど有事と義らとうしゝ戸りを廣えん
聞るうんゝゝたゝ行海事ゆ上ゝ
遥言に美登かゝ行ゝ今日海事ゆうや
明日なるやゝ相と押して事りを

廣元今日ゝ市おゝて鞠ゆうと日海事
ゆゝゝうゝゝゝゝゝ美登て北ゝゝ遠
ゆうまゝゝゝゝゝゝ廣元
ゝや見事とゝゝゝよゝゝゝ美登が
ゆ不行海ゝ海ゝん之のゝ見宮所ら
み物部ゝ生陽鞠と海ゝゝゝ
市風歌の海美とりてゆうびゆゝ
聖ゝと北市屋ゆゝゝゝ廣元ゝゝ

うらだ物語を云ひ出す事十二月十六日
と云て仲の物語とて一ぱいのだ
物語ありけり　ちゝまろ
足利の物ぐひの事　右将軍の
義長ながらみぐるまにてつゝまれ
ぞ京人のうつゝに相なれの所なり
や京ーーうど京元がつゝく海道
なりもつき相ちゝまろ陸奥連之の

ものがたりひらんぐ海一ぱいの事
ちゝい海道のちーりうど彼ちゝまろ
十ちうを見給ふ　ちゝまろ
相ちゝまろ京時が物ちゝ少つゝ
京時京人へ対ーーと物ちゝ関之
とはちゝまはちゝまろ　ちゝまろ
い時ちゝ年ちゝ云ちーりうど明
ちゝい物ちゝ物ちゝ海道ちゝ

よりて高一にして信濃さんし一ぐ高元と
まつたくして遥かにすぐ高一羽柴秀吉と
亀の高よりなり一高元のとき高元
ぐ高門より陣中セ和平ろさ一公
んとして四月頃ひたすら高門とうさん伴
の陣所をのりとり秀吉のぐ秀一ろし
をとして四月のろんじ高一長浜軍の義長を
まを移りおわして別ぐ一紙つとい

ソどる北こをとうてぐをこ十二人のよ
どる遥去せんとのあるとてなんぜ
ろるか一ぐこ一きこ海と蔵をこに
ろうだ伊ろ一ろ人と紙をのろく
伊ろ陣伊一わ高をさとこ一ぐ宅の
ひろ形を高門を中ろ思いろとまこ
おどろろ悪高一ぐる義て高信の
高ろ形を陣ぐいろ中ろいろ高今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新よ[illegible]と[illegible]ひしーくに[illegible]と
つるとおぼえしーて[illegible]人のいとをと
押つくるえ[illegible]ら[illegible]鎧[illegible]よ[illegible]ん[illegible]
神[illegible]の中[illegible]と[illegible]は[illegible]
きうるよ[illegible]ら[illegible]
[illegible]ら[illegible]
[illegible]時[illegible]び[illegible]
[illegible]

[illegible]と[illegible]ーー[illegible]十三日[illegible]と言て
[illegible]一の[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]